

## 校歌の歌詞の言語的特徴に関する計量的研究：滋賀県公立学校を対象として

著者	陳 ?, 松本 理美, 小椋 秀樹
雑誌名	言語資源活用ワークショップ発表論文集
巻	4
ページ	72-84
発行年	2019
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00002556">http://doi.org/10.15084/00002556</a>

## 校歌の歌詞の言語的特徴に関する計量的研究

### — 滋賀県公立学校を対象として —

陳曦（立命館大学大学院文学研究科）

松本理美（立命館大学大学院文学研究科）

小椋秀樹（立命館大学文学部）

## Quantitative Study on Linguistic Features of the Lyrics of School Songs: A case of Shiga Public Schools

CHEN Xi (Graduate School of Letters, Ritsumeikan University)

Satomi Matsumoto (Graduate School of Letters, Ritsumeikan University)

Hideki Ogura (College of Letters, Ritsumeikan University)

### 要旨

校歌は、その学校を象徴するものであり、校風、所在地の地理的特徴などが歌詞に歌われることが多い。式典で歌うなど、児童・生徒にとって身近なものでもある。しかし校歌の歌詞の言語的特徴について分析した研究は少なく、いまだ十分に明らかにされているとは言い難い。そこで筆者らは、滋賀県の公立小中高を対象に校歌の歌詞を各校 Web ページから収集し、コーパスを構築した。このコーパスを基に、MVR、受身形、動詞「V+あう」、連体修飾節といった観点から歌詞の言語的特徴について多角的な分析を行った。

調査の結果、次のことが明らかとなった。(1) 名詞比率と MVR とによる分析から、小学校は「ありさま描写」的な歌詞が多く、中学校・高校になると「動き描写」的な歌詞になる傾向が見られる。(2) 受身形・動詞「V+あう」（「育まれる」「助け合う」等）については、小学校の歌詞に多く見られるが、中学校・高校になると減少する傾向が見られる。(3) 連体修飾節は小・中・高校の教科書（書き言葉）とは異なって補足語修飾節に集中する傾向が見られ、また主名詞は学年上昇とともに生徒や学校を表す名詞が減少し、自然や徳目を表す名詞が増加する傾向が見られる。

### 1. はじめに

コーパスを活用した日本語研究が盛んになる中で、近年、J-POP や歌謡曲等の歌詞を対象とした計量的な研究が増えてきている。これらの研究では、歌詞を電子テキスト化した上で、形態素解析を施し、語の頻度、特徴語といった観点から J-POP、歌謡曲の歌詞の特徴、その変遷などについて考察を行っている。

J-POP、歌謡曲等と同様、多くの人々にとって身近な歌として校歌が挙げられる。校歌は、その学校を象徴する歌であり、校風や学校所在地の山、川といった地理的特徴、史跡といったものが歌詞に用いられることが多い。また、入学式をはじめとする学校の式典で歌われるなど児童・生徒にとっては、非常に身近な歌である。

校歌の言語的特徴については、従来、文語的な表現の使用が指摘されている。永野 (1958:15) では、ある小学校の歌詞の一部を紹介した上で、「不消化な美文調」と批判してい

る。最近の研究では、尾崎・杉尾 (2015) が倉敷市の公立小中高校を対象として、動詞・助動詞・形容詞の活用に関する調査を行っている。尾崎・杉尾 (2015) では、動詞・助動詞 (二段活用・一段活用)、形容詞連体形・五段動詞連用形の非音便形・音便形を取り上げ、学校種や学校設立年、校歌制定年による文語形 (二段活用、非音便形)、口語形 (一段活用、音便形) の使用割合の差異を明らかにしている。

また、校歌に歌われる学校所在地の景観等に着目した研究も見られる。石井 (2015:130) では、「校歌に現れる固有名詞のうち、山や川や史跡、建築物など学校周辺の特徴的なもの」を「環境語」とし、埼玉県公立中学校を対象に各地域における特徴的な環境語などについて分析を行っている。

このように校歌について日本語学の立場から取り上げた研究はあるものの、その数は少なく、校歌の言語的な特徴について十分に明らかにされているとはいえない状況にある。このような問題意識から、筆者らは、校歌の言語的特徴に関する事例研究として滋賀県公立学校を対象とした調査を行うこととした。今回は、名詞比率と MVR (小椋)、動詞の受身形と複合動詞「V+あう」(陳)、連体修飾節 (松本) の三つの観点から調査を行った。

以下、2 節で調査対象の選定について述べ、3 節で今回作成した滋賀県公立学校校歌の形態論情報付きデータについて紹介する。続いて 4 節で調査結果を報告し、最後に 5 節で本稿をまとめる。

## 2. 調査対象

本節では、滋賀県の公立学校を対象とした理由について述べる。

筆者らは、校歌の歌詞の言語的特徴に関する事例研究として近畿 2 府 4 県 (大阪、京都、滋賀、兵庫、奈良、和歌山) の中から一つの府又は県を選定し、その公立学校 (小中高) の校歌を対象とすることとした。府・県の選定は、以下の 2 点を目安として行った。

(1) ・学校数が多すぎないこと。

・各学校の Web サイトから校歌を収集するため、校歌を Web に掲載している学校が多いこと。

この目安に基づいて、まず公立学校が 1000 校を超える大阪府、兵庫県を調査対象外とした。次に、京都府は校歌を Web に掲載している学校が少ないことから、調査対象外とした。

残った 3 県の公立学校は、滋賀県が 365 校、奈良県が 336 校、和歌山県が 394 校であった。そこで公立学校数の多い滋賀県と和歌山県とを候補とし、小・中・高校ごとに校歌の Web 掲載数を調査した (表 1)。この結果、校歌を Web に掲載している学校が小・中・高校のいずれにおいても多く、6 割を超えている滋賀県を調査対象とすることとした。

表 1 : 校歌の歌詞の Web 掲載校 (学校種別)

		小学校	中学校	高校
滋賀	学校数	222	96	43
	掲載校数	135	64	33
和歌山	学校数	243	117	34
	掲載校数	82	37	24

### 3. 分析データ

滋賀県公立学校校歌の歌詞を各学校の Web サイトから収集し、電子テキストを作成した。校歌が各学校の Web サイトに掲載されていない場合、その学校は調査対象外とした。

校歌を収集したところ、文語体の校歌と口語体の校歌とが見られた。学校種別に文語体・口語体の校数・割合を集計し、表 2 として示した。文体の判別は、文末形式によって行った。文末に「なり」「き」「む」といった文語助動詞が用いられているものを文語体とし、それ以外は口語体に分類した。

表 2：校歌の文体（学校種別）

	口語		文語	
	小	96	71.1%	39
中	28	43.8%	36	56.3%
高	8	24.2%	25	75.8%

表 2 を見ると、文語体の比率が小・中・高校の順に高くなることが分かる。ただし最も文語体の比率が低い小学校でも、文語体が約 3 割を占めている。児童にとって身近な歌である校歌の歌詞が、児童にとっては難解な文体で作られているということが出来る。

校歌の電子テキストを形態素解析するに当たって、「Web 茶まめ」を用いた。「Web 茶まめ」は、形態素解析辞書 UniDic を用いた解析を実行できる Web アプリケーションである。今回、「Web 茶まめ」を用いたのは、形態素解析辞書 UniDic が持つ、

(2) ・短単位というゆれの少ない斉一な単位を採用している。

・語種をはじめとする言語研究に有用な情報を付与することができる。

という特徴が、言語の計量的研究に適しているためである<sup>1</sup>。

UniDic で採用している短単位は、現代語で意味を持つ最小の単位二つが 1 回結合したもので、1 単位として扱う言語単位で、漢語なら 2 字漢語が、和語なら二つの要素から成る複合語が 1 単位となる。外来語は、原語で 1 語に相当するものを 1 単位とする。短単位では、「運動場」のような 3 字以上の漢語は「運動／場」のように構成要素に分割される。そのため、名詞比率、漢語比率が高くなる傾向がある。また、一般に混種語とされるものうち「勉強する」「健康だ」のような語は、「運動／する」「健康／だ」と、2 単位以上に分割される。その結果、例えば「運動する」は「運動」が漢語に、「する」が和語に分類されるため、混種語の比率が低くなる傾向がある。今回の調査結果を参照する場合には、以上のような短単位の特徴について注意する必要がある。

UniDic には、「現代語」「旧仮名口語」「近代文語」「中古和文」といった複数の辞書があり、形態素解析するテキストの文体や表記によって辞書を使い分ける必要がある。今回の調査では、口語体の歌詞の形態素解析には「現代語」の、文語体の歌詞の形態素解析には「中古和文」の辞書を使用した。

形態素解析を行ったところ、小学校の校歌を中心に誤解析が多く見られた。これは、歌詞の表記に平仮名が多く用いられていることに起因するものである。これら誤解析について

<sup>1</sup> 形態素解析用辞書 UniDic の概要については、伝・小木曾・小椋他(2007)を参照。短単位の設計方針、認定規程等については、小椋・小磯・富士池他(2011)を参照。

は、可能な範囲で人手修正を行った。ただし全ての語について確認を行ったわけではないため、修正していない誤解析もある。

以上のようにして作成した形態論情報付きデータの規模は、異なり語数で2,376、延べ語数で19,901である（空白、記号を除く。）。学校種別の異なり語数、延べ語数は表3のとおりである（空白、記号を除く。）。

表3：学校種別の異なり語数・延べ語数

	小学校	中学校	高校
異なり	1,602	1,149	878
延べ	10,669	5,982	3,249

学校種別の語種比率を表4に、同じく品詞比率を表5にまとめた。品詞比率は、体（名詞、代名詞）、用（動詞）、相（形状詞、副詞、連体詞、形容詞）、他（感動詞、接尾辞、接頭辞）の4分類で集計している。

表4：語種比率（学校種別）

	小学校				中学校				高校			
	異なり		延べ		異なり		延べ		異なり		延べ	
和	1032	77.3%	5592	81.3%	757	75.8%	3135	79.6%	598	75.4%	1705	81.4%
漢	286	21.4%	1260	18.3%	234	23.4%	796	20.2%	190	24.0%	385	18.4%
外	7	0.5%	10	0.1%	1	0.1%	1	0.0%	1	0.1%	1	0.0%
混	10	0.7%	14	0.2%	7	0.7%	7	0.2%	4	0.5%	4	0.2%

表5：品詞比率（学校種別）

	小学校				中学校				高校			
	異なり		延べ		異なり		延べ		異なり		延べ	
体	900	59.3%	4,064	55.1%	665	60.5%	2,394	56.8%	495	59.0%	1,346	60.0%
用	369	24.3%	1,643	22.3%	272	24.7%	978	23.2%	228	27.2%	531	23.7%
相	156	10.3%	948	12.9%	117	10.6%	441	10.5%	88	10.5%	233	10.4%
他	92	6.1%	719	9.8%	45	4.1%	400	9.5%	28	3.3%	132	5.9%

表4を見ると、いずれの学校種でも和語比率が最も高い。異なりでは、小学校で和語比率が高く、中学校・高校で漢語比率が高くなっている。小学校では、外来語が異なりで7語用いられている。延べで、高校の和語比率が小学校とほぼ同じ割合となっているのは、高校の歌詞に文語体が多いことによるものと考えられる。

表5を見ると、いずれの学校種でも体言の比率が最も高い。異なりでは、高校の用言比率(27.2%)が小学校・中学校より高くなっている。延べでは、小学校・中学校・高校と進むにつれて体言比率が高くなっており、小学校では中学校・高校より相言比率が高くなっている。

#### 4. 調査結果

##### 4.1 名詞比率と MVR

品詞比率から文体的特徴を把握しようとした研究として、樺島・寿岳 (1965) がある。樺島・寿岳 (1965 : 16) では、表現の在り方に「事からの骨組みだけを書くもの」と「事からのこまかい部分まで書こうとするもの」とがありとし、前者を要約的文章と、後者を描写的文章と呼ぶ。さらに、描写的文章を、色や状態、質について述べるありさま描写と、行動、変化について述べる動き描写とに分ける。そして、これらの分類を行うための客観的指標として品詞比率に着目している。

樺島・寿岳 (1965) は、文体的特徴を把握する指標として MVR を提案し、名詞比率と MVR との組合せで文体的特徴を把握しようとしている。MVR は、「 $100 \times \text{相の類の比率} \div \text{用の類の比率}$ 」で求められる値である。

名詞比率については「一般に要約的な文章は名詞 N の比率が大きく、描写的な文章は名詞の比率が小さい」(pp.30-31) と述べ、MVR については「MVR の値が大きいほどありさま描写的であり、MVR の値が小さいほど動き描写的である」(p.32) と述べている。このような意味を持つ名詞比率と MVR との組合せから、

- (3) ・名詞比率 N が大きく、MVR が小さい文章には要約的な文章が多い。
- ・N が小さく、MVR が大きい文章にはありさま描写的な文章が多い。
- ・N が小さく、MVR が小さい文章には動き描写的な文章が多い。 (p.35)

という文体的特徴が指摘できるとした。

本節では、樺島・寿岳 (1965) を踏まえ、名詞比率、MVR を用いて校歌の文体的特徴を明らかにしたい。横軸に名詞比率を、縦軸に MVR を取った散布図を図 1 に示した。図 1 では、232 の校歌を学校種によって分類している。

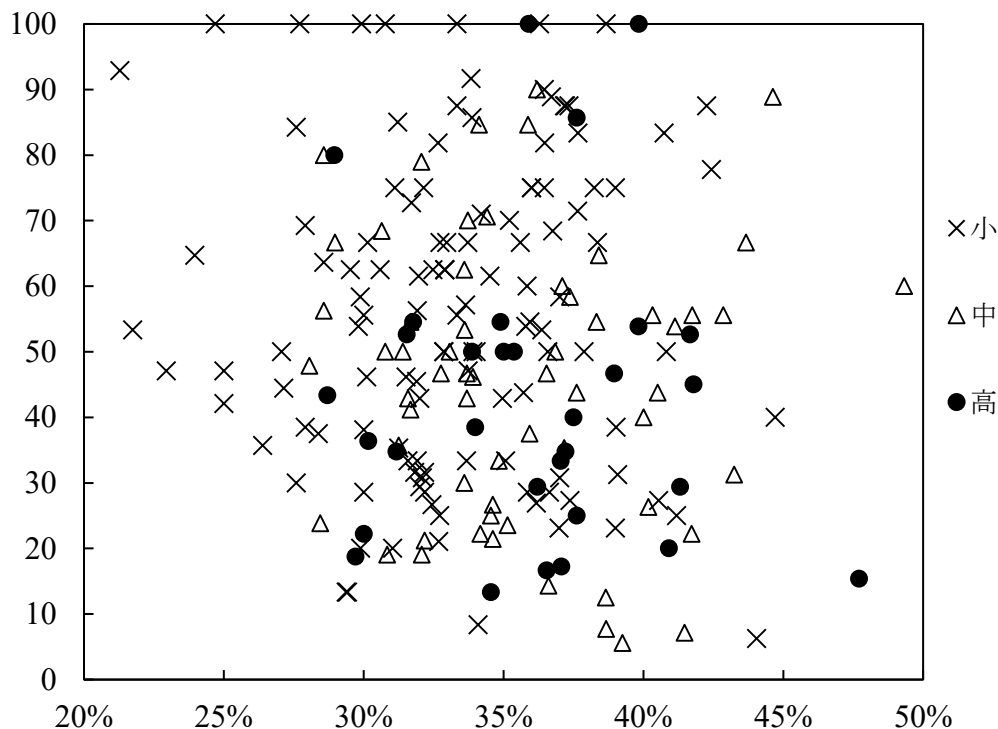


図 1 : 名詞比率と MVR

学校種によって校数に違いがあること、MVR・名詞比率とも広い範囲に分布していることから、特徴を把握しづらい面はあるが、MVRについては小学校が高く、中学校・高校になると低くなる傾向が見られる。また名詞比率については小学校が低く、中学校・高校になると高くなる傾向が見られる。したがって文体的特徴としては、小学校の校歌がより「ありさま描写的」であり、中学校・高校になると「動き描写的」であるといえることができる。

小学校の校歌が「ありさま描写的」となった要因としては、前節の品詞比率で見たとおり相言比率が、中学校・高校に比べて高いことが挙げられる。表6は、小学校の校歌の高頻度語（上位20位）を一覧にしたものである。

表6：小学校校歌の高頻度語

語彙素	度数	語彙素	度数	語彙素	度数
学校	184	学び	67	楽しい	50
等（ら）	159	心	66	励む	48
小	122	行く	63	私	48
我	107	希望	62	輝く	47
皆	84	子	59	清い	47
学ぶ	81	良い	57	校	47
明るい	73	高い	55	強い	47
緑	68	山	55	僕-代名詞	47

この表を見ると、「明るい」「良い」「高い」「楽しい」の4語が20位以内に入っている。このような形容詞が高頻度で用いられていることで、相言比率が高くなっていると考えられる。

次に挙げるのは、高頻度の形容詞4語のうち「明るい」「楽しい」「良い」の3語が歌詞に用いられている大津市立仰木の里東小学校の校歌である。

(4) 比叡の山の 風かおる 歴史ゆかしい この丘に  
 楽しく学ぶ しあわせの ほほえみかわし 大空に  
 のびる よい子の 里東  
 琵琶のみどりの 波ひかる 自然ゆたかに 恵まれて  
 明るく強く 生きてゆく 手と手をつなぎ 学び舎に  
 はげむ よい子の 里東  
 仰木の里の 草萌ゆる 文化はぐくむ 心意気  
 熱い 思いの ぼく わたし 心あわせて ふるさとに  
 うたう よい子の 里東

この校歌の名詞比率は30%、MVRは63である。名詞比率が小さく、MVRが大きい「ありさま描写的」な校歌といえる。「明るい」「楽しい」「良い」以外にも「ゆかしい」「強い」といった形容詞も使われている。また、「良い」は「よい子」という語連続で1番から3番まで歌の末尾に繰り返し用いられている。小学校の校歌は、「どのような」児童なのか、「どのように」活動しているのかを歌う点に特徴があるといえる。

次の(5)は、大津商業高校の校歌である

(5) 若き生命 緑に燃えて 涯しなく 空澄み渡る

希望高く 学ぶ われらここにあり  
 大津商業高校  
 若き歌 比叡に響けば 湖こえて 鈴鹿の山呼ぶ  
 朗かに 集う われらここにあり  
 大津商業高校  
 若き力 溢れ動けば 風狂い 雲は渦巻く  
 眉あげて 進む われらここにあり  
 大津商業高校

この校歌の名詞比率は38%，MVRは40である。名詞比率がやや大きく，MVRが小さい「動き描写的」な校歌といえる。(4)に見られた「明るく強く」のような形容詞の並列や「よい子」のような形容詞を含む語連続の反復が見られないことから，MVRが小さくなっていると考えられる。形容詞をはじめとする相言による描写が減っていくところに中学校・高校の校歌の特徴があると考えられる。

## 4.2 動詞

### 4.2.1 受身形

動詞に着目して小・中・高校の校歌を見てみると，動詞の使用について学校種による差異のあることが分かる。そこで，本節では校歌における動詞の使用について，特に受身形と複合動詞「V+合う」とを取り上げ，その使用実態を見ていく。

受身形は，高校の校歌には使用されていないが，中学校・小学校の順にその使用が多くなっている。どのような受身形が用いられているか，小学校・中学校の別に示したのが，表7と表8である。表7には小学校の，表8には中学校の校歌に用いられた受身形とその度数とを示した。

表7：受身形の使用（小学校）

受身形	度数
育まれる	5
囲まれる	2
歌われる	1
育てられる	1
照らされる	1
包まれる	1
導かれる	1

表8：受身形の使用（中学校）

受身形	度数
育まれる	2
培われる	1
結ばれる	1

表7と表8を見ると，小学校の校歌では異なり7，延べ12の受身形が，中学校の校歌では異なり3，延べ4の受身形が用いられていることが分かる。小学校の校歌，中学校の校歌とも最も度数の高い受身形は「育まれる」である。

次に，小学校，中学校の校歌に用いられた受身形の例を示す。用例は，小学校，中学校の別に示し，動作主が現れる用例では，動作主が有情物である場合〔有〕と，無情物である場合〔無〕と記した。

#### 【小学校】

(6) 恵と愛に 育まれ [無]



- (7) 澄みし心に 育まれる [無]
- (8) 深き文化に はぐくまれ [無]
- (9) 豊かな郷里に 育まれ [無]
- (10) あつき恵みに はぐくまれ [無]
- (11) 緑の自然に 囲まれて [無]
- (12) 秋は稲田に 囲まれて [無]
- (13) 志賀は緑に つつまれて [無]
- (14) 比叡の夕日に 照らされて [無]
- (15) よい先生に 導かれ [有]
- (16) 良い先生に 育てられ [有]
- (17) 近江の都と うたわれた

【中学校】

- (18) 天地の恵みに 育まれ [無]
- (19) 姉妹の流れに 培われ [無]
- (20) 愛と敬とに 結ばれて
- (21) 正しくあれと 育まれ

(6) から (21) までの用例を見ると、受身形 16 例のうち、動作主が示された例は 13 例あり、その全てが助詞「に」によって示されていることが分かる。動作主の内訳は、有情動作主 2 例、無情動作主 11 例で、ほとんどの動作主が無情物となっている。また、中学校校歌では有情物の動作主は見られない。

次に国立国語研究所 (2004) を参照して、動作主を意味によって分類すると、「人間活動－精神および行為」(5 例：恵(恵み)、愛、心)と「自然物および自然現象」(4 例：自然、緑、夕日、流れ)とで半数以上を占めることが分かった。以下、「人間活動の主体」(4 例：郷里、先生、都)、「生産物および用具」(1 例：稲田)となっている。

以上のことから、校歌に用いられた受身形の動作主は無情動作主が多く、それらを意味の面からみた場合「人間活動－精神および行為」「自然物および自然現象」に属するものが多いことが明らかとなった。

4.2.2 複合動詞「V+合う」

複合動詞「V+合う」は、小学校で最も多く用いられており、中学校・高校の順に少なくなる。どのような「V+合う」が用いられているか、学校種別に示したのが、表 9 から表 11 である。表 9 には小学校の、表 10 には中学校の、表 11 には高校の校歌に用いられた「V+合う」(語彙素)とその度数とを示した。

表 9、表 10、表 11 を見ると、小学校の校歌では異なり 15、延べ 27 の、中学校では異なり・延べ共に 10 の、高校では異なり 5、延べ 6 の「V+合う」が用いられている。

小学校と中学校では「触れ合う」「学び合う」「誓い合う」「睦み合う」「分かち合う」の 5 語が共通しており、小学校と高校では「励み合う」が共通している。一方、中学校と高校の間には共通する語は見られない。

表9:「V+合う」の使用状況(小学校)

語彙素	度数	語彙素	度数	語彙素	度数
助け合う	7	寄せ合う	2	誓い合う	1
取り合う	2	分け合う	2	励み合う	1
励まし合う	2	落ち合う	1	睦み合う	1
触れ合う	2	鍛え合う	1	呼び合う	1
学び合う	2	育て合う	1	分かち合う	1

表10:「V+合う」の使用状況(中学校)

語彙素	度数	語彙素	度数
語り合う	1	触れ合う	1
競い合う	1	学び合う	1
誓い合う	1	磨き合う	1
協力し合う	1	睦み合う	1
組み合う	1	分かち合う	1

表11:「V+合う」の使用状況(高校)

語彙素	度数
励み合う	2
築き合う	1
集い合う	1
響き合う	1
寄せ合う	1

次に「V+合う」を意味の面から見ると、小学校の校歌では「助け合う」「励まし合う」「取り合う」「学び合う」「触れ合う」「分け合う」といった児童同士の相互扶助、共同成長を表すような語が多く用いられているといえる。一方、中学校の校歌では「学び合う」「協力し合う」「語り合う」のような相互扶助を表すものもあるが、「競い合う」「磨き合う」のような競争を表すような語も見られる。高校については、語数が少ないことから特徴を指摘することは難しい。

以上のことから、複合動詞「V+合う」については、学校種による量的な違いがあるだけでなく、用いられている動詞の意味的な面でも違いのあることが明らかとなった。

#### 4.3 連体修飾節と主名詞

本節では校歌の歌詞の複文に着目した分析を行う。歌詞が一般的な書き言葉の文章とは異なる様々な特徴を有していることは知られているが、複文に関する分析はあまり見られない。そこで、校歌の歌詞の中で複文について、学校の国語教科書と比較して複文構成の概観を捉える。その上で、複文を構成する連体修飾節に着目し、連体修飾節が修飾している主名詞について学校種別に調査し、校歌における連体修飾節と主名詞の特徴を明らかにする。

なお、複文を構成する関係節の意味分類は原則として松本(2017)に従う。

##### 4.3.1 複文の関係節の計量的分析

松本(2018,2019)は、学校の国語教科書の複文には、連用系節(副詞節と並列節)よりも連体系節(補足節と連体修飾節)の割合が高い傾向にあり、これは学年が上昇するほど顕著になることを明らかにした(図2)。しかし、校歌にはこの傾向がみられず、連体系節と連用系節はほぼ同じ割合で出現し、高校になると連体系節よりも連用系節の方が若干多くなった。また、校歌に補足節がほとんど出現しないこと、並列節が教科書の2倍程度の割合で出現することも明らかになった(図3)。

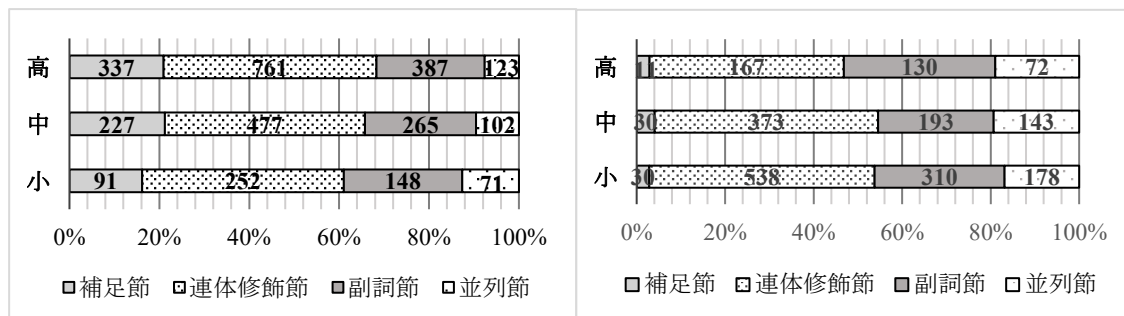


図 2：教科書の複文構成

図 3：校歌の複文構成

教科書に比べ校歌に並列節が顕著に多いのは校歌には接続詞がほとんど用いられないためであると考えられる。また、校歌における副詞節の6割以上が付帯状況節であったことなど、教科書とは全く異なった特徴を示した。

#### 4.3.2 連体修飾節と主名詞の計量的分析

松本 (2019) は、学校の国語教科書における連体修飾節について調査を行い、連体修飾節を補足語修飾節、命題補充節、相対名詞節<sup>2</sup>に下位分類して計量分析を行った (図 4)。これに倣って、校歌の歌詞における連体修飾節の種類別出現割合について調査を行った。結果は図 5 に示した通りである。

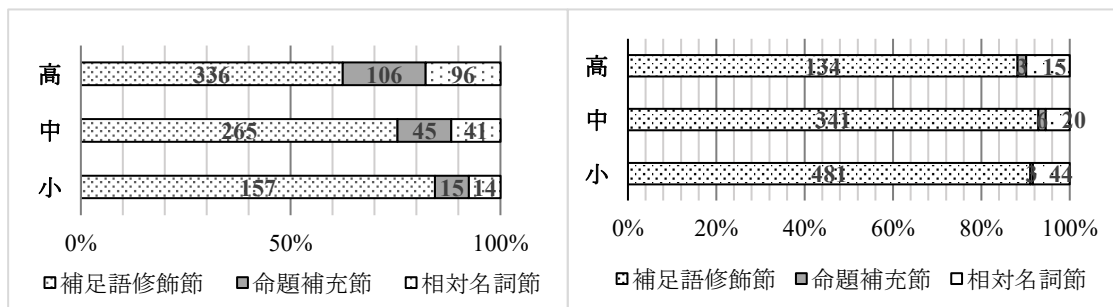


図 4：教科書の連体修飾節

図 5：校歌の連体修飾節

学校種を問わず校歌における連体修飾節はおおよそ9割が補足語修飾節であった。これは、図 4 で示した教科書の連体修飾節とは大きく異なっている。この理由としては、連体修飾節と主名詞が統語的な関係にある補足語修飾節は、連体修飾節と主名詞が意味的な関係にある命題補充節や相対名詞節に比べ理解が容易であること、述語の項となっている名詞の格助詞を削除して主名詞として述語の後ろに置くことで、名詞を強調するとともに、音数律の調整が可能になることなどが考えられる。

次に主名詞となる語について調査を行った。主名詞は、単独で現われる語に比べ、修飾節によって意味が補われ、強調されている重要な語であると考えられる。そこで、歌詞に出現する主名詞により、校歌の特徴を捉える分析を試みた。主名詞を固有名詞と普通名詞に分類し、固有名詞を学校名と地名に、普通名詞を、「学校を表す名詞」、「生徒を表す名

<sup>2</sup> 分類は大島 (2010) に倣ったもので、補足語修飾節は、寺村 (1992) の「内の関係」、命題補充節・相対名詞節は「外の関係」にあたる。

詞」、「自然を表す名詞」、「徳目を表す名詞」、「その他の名詞」の5種類に、文脈をふまえて下位分類した。結果は図6の通りである。

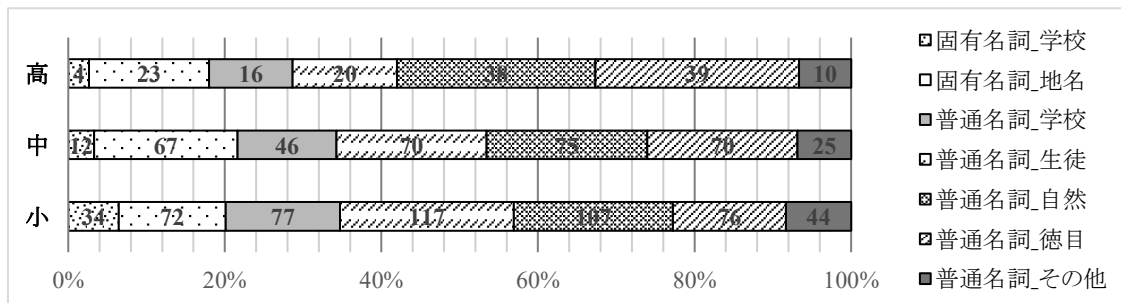


図6：主名詞の分類

固有名詞と普通名詞に分けると、固有名詞は2割前後に留まり、大半が普通名詞により構成されている。これは、校歌が学校外、地域外の人に学校をアピールするための「外向きの歌」ではなく、校内における団結力を高めたり、児童生徒への教育的な働きかけを行ったりするために作られた「内向きの歌」であることを示唆している。牛島 (2001) は校歌を「独自の教育方針と学校の理想を歌い、校風を発揚するために制定されたもの」と指摘しているが、これも学校の構成員に向けた“校風の発揚”であると考えられる。

学校名や学校・生徒を表す普通名詞は学年が上昇するほど減少する傾向にあり、自然・徳目を表す普通名詞は学年の上昇とともに増加する傾向にあることが分かった。小学校の校歌では、学校名や学校・生徒を表す普通名詞を主名詞とすることで、児童が主体であることを強調している。身近で具体的な人や物を主名詞とすることにより、歌詞の理解を容易にするという狙いがあるとも考えられる。一方、学年上昇とともに自然・徳目を表す普通名詞が増加するのは、徳目を表す普通名詞のほとんどは抽象名詞であり、難易度の高い語が多いことが影響している。また、歌詞が「今、ここ」という個（私）の視点（今の個の姿）によるものから、学校（社会）の構成員という公の視点（次世代の担い手）によるものに変遷しているとも捉えられる。これは、4.1節の「小学校の校歌がより「ありさま描写的」であり、中学校・高校になると「動き描写的」である」という分析結果とも合致するものであると言える。

本節の最後に普通名詞の中で、学校種によって差異が認められた「生徒を表す名詞」と「徳目を表す名詞」について、学校種別に高頻度語を調査した。結果は表12、表13の通りである。

表12：頻度の高い「生徒を表す普通名詞」（ ）内は頻度

小学校	中学校	高校
われら (30)	われら (36)	われら (6)
子 (30)	若人 (17)	若人 (6)
ぼく・わたし (25)	からだ (8)	
みんな (11)		
からだ (11)		

※「からだ」はからだの一部を表す語（手、瞳など）を含む

表 13 頻度の高い「徳目を表す普通名詞」：( )内は頻度

小学校	中学校	高校
心 (7)	心 (5)	心 (4)
力 (7)	夢 (5)	命 (3)
未来 (6)	理想 (5)	力 (3)
理想 (6)		
希望 (5)		
歴史 (5)		

※異なり語数で小学校は 31 語，中学校 43 語，高校 29 語

「生徒を表す名詞」では小・中・高校のすべてにおいて、「われら」が最多であった。小学校では「生徒を表す名詞」の中に高頻度の語が多く見られた。「徳目を表す名詞」については、顕著に頻度の高い語はなかったが、小・中・高校のいずれにおいても語の種類が豊富であった。これは、「生徒を表す名詞」が歌詞全体を通して何度も繰り返し出現するのに対して、「徳目を表す名詞」は歌詞の中で 1 度だけしか出現しない語が多いことに起因している。

本節では、歌詞の中の複文に着目し、中でも連体修飾節と主名詞について行った調査の結果を述べた。校歌の複文構成、連体修飾節の種類別出現割合は、書き言葉（教科書）とは異なった特徴を示した。また、主名詞についての調査では、校歌が校内の団結力を高め、児童生徒の向上心を鼓舞する「内向きの歌」であること、学年上昇とともに歌詞の主名詞が具体から抽象に、個から公に変化していることが明らかになった。

## 5. 終わりに

本稿では、校歌の言語的特徴に関する事例研究として、滋賀県の公立小学校・中学校・高校の校歌を対象に、歌詞における名詞比率と MVR，受身形・動詞「V+あう」，連体修飾節と主名詞についての調査を行った。調査の結果明らかになったことをまとめると以下の通りである。

- (22)・校歌の文体的特徴を名詞比率と MVR との組合せで見た場合、小学校は「ありさま描写」的な歌詞が多く、中学校・高校になると「動き描写」的な歌詞になる傾向が見られる。
- ・校歌に用いられた受身形の動作主は無情動作主が多く、それらを意味の面からみた場合「人間活動－精神および行為」「自然物および自然現象」に属するものが多い。
  - ・複合動詞「V+合う」については、学校種による量的な違いがあるだけでなく、用いられている動詞の意味的な面でも違いがある。
  - ・校歌の複文構成は、書き言葉（教科書）に比べ、補足節が少なく、並列節が多い。また、書き言葉において学年上昇とともに増加した連体節が、学年上昇とともに減少する。
  - ・連体修飾節の種類別調査においては、書き言葉のような学校種による差異はなく、小・中・高校ともに、連体修飾節と主名詞が統語的な関係にある補足語修飾節が 9 割を超える。

- ・連体修飾節の主名詞においては、学年上昇とともに学校や生徒を表す普通名詞は減少し、自然や徳目を表す普通名詞が増加する。
- ・校歌は校内の団結力を高め、児童生徒の向上心を鼓舞する「内向きの歌」であるといえる。

なお、今回の調査では短単位に基づいて、計量的手法により校歌の言語的特徴を明らかにした。3節で述べたように、漢語の複合語が多い文章を短単位で解析すると、名詞比率、漢語比率が高くなる傾向がある。今後、長単位を用いて再調査を行う必要がある。また、学校種別に言語的特徴を見たが、小・中・高校のいずれにも口語体の校歌と文語体の校歌とがある。文体別に言語的特徴を見ていく必要がある。

## 文 献

- 石井駿生 (2015) 「埼玉県公立中学校の校歌の歌詞分析 — 環境語に注目して —」『語文』152 輯, pp.(15)-(25).
- 牛島達郎 (2001) 「校歌に関する調査研究」『福岡女学院大学紀要・人文学部編』11 号, pp.45-73.
- 大島資生 (2010) 『日本語連体節修飾節構造の研究』ひつじ書房.
- 小椋秀樹・小磯花絵・富士池優美・宮内佐夜香・小西光・原裕(2011) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集 第4版(上・下)』(国立国語研究所内部報告書 LR-CCG-10-05-01, LR-CCG-10-05-02).
- 尾崎善光・杉尾瞭子 (2015) 「校歌の歌詞に関する言語学的研究 — 倉敷市の公立学校の場合 —」『清心語文』17 号, pp.25-42.
- 国立国語研究所 (2004) 『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書.
- 寺村秀夫 (1992) 「連体修飾のシンタクスと意味 — その 1 —」『寺村秀夫論文集 I』, pp.157-207.
- 伝康晴・小木曾智信・小椋秀樹・山田篤・峯松信明・内元清貴・小磯花絵(2007) 「コーパス日本語学のための言語資源 — 形態素解析用電子化辞書の開発とその応用 —」『日本語科学』22, pp.101-123.
- 永野賢 (1958) 「校歌の歌詞」『言語生活』83 号, p.15.
- 松本理美 (2018) 「日本語従属節の意味分類基準策定について — 「鳥バンク」節間意味分類体系再構築の提案 —」『国立国語研究所論集』15 号, pp.107-133.
- 松本理美 (2018) 「外国ルーツ高校生作文に見られるテ形節の特徴 — 国語教科書との比較を通して —」『日本語文法学会第 19 回大会発表予稿集』, pp.41-48.
- 松本理美・有田節子 (2019) 「国語教科書における連体修飾節構造 — 外国ルーツ高校生の日本語リテラシー教育のための基礎調査 —」『KLS Selected Papers 1』, pp.73-84.

## 関連 URL

- 形態素解析支援アプリケーション「Web 茶まめ」 <http://chamame.ninjal.ac.jp/>
- 滋賀県教育委員会・県内学校一覧(平成 31 年度版)  
<https://www.pref.shiga.lg.jp/edu/school/gakkouichiran/104796.html>